

# 教授のお気に召すまま

*Secret Lecture*

森本あき



story

**Aki Morimoto**

illustration

**Hasuno Mizuki**



「よくできました」

ちゅっ、ちゅっ、と何度もキスされて。それから、顔を後ろ  
に向けさせられた。包み込むように唇を吸われて。  
ああ、キスされてるんだ、と思う。

教授のお気に召すまま

《立読み版》

森本 あき

イラスト 水貴 はすの

「ええーっ！」

いま聞いた言葉に驚いて、山本遊衣やまもと ゆいは叫んだ。

昼休みの学食。いつものように何人かの友達とランチを食べていたら、その中の一人が言ったのだ。

『やっど一社、内定出たぜ』

「内定!? 何それ! もう就職活動してんの!?!」

友達連中が、あきれたような顔で遊衣を見る。

「まあ、遊衣らしいっていうか、何ていうか。去年の二月の就職ガイダンスで言ってたじゃん。年々、就職活動の時期が早まっています、って。聞いてなかったわけ?」

「ガイダンス? そんなの、あったっけ?」

あきれていた顔が、いっせいに心配そうになる。

「大丈夫か、おまえ? マスコミ関係なんて、とっくにみんな内定出てるぜ? まさか、遊衣、マスコミ志望じゃねえよな?」

「うん、違う。そんな高望みしてないよ」

「大企業も、だいたい内定済みだぞ」

「別に、大きな企業じゃなくていい。つぶれなさそうな会社の普通のサラリーマンで」

「いまどき、大企業じゃなきゃ、どこだっていつつぶれてもおかしくねえんだよ。ったく、のんきつつか、何つか」

ここでいっせいに。

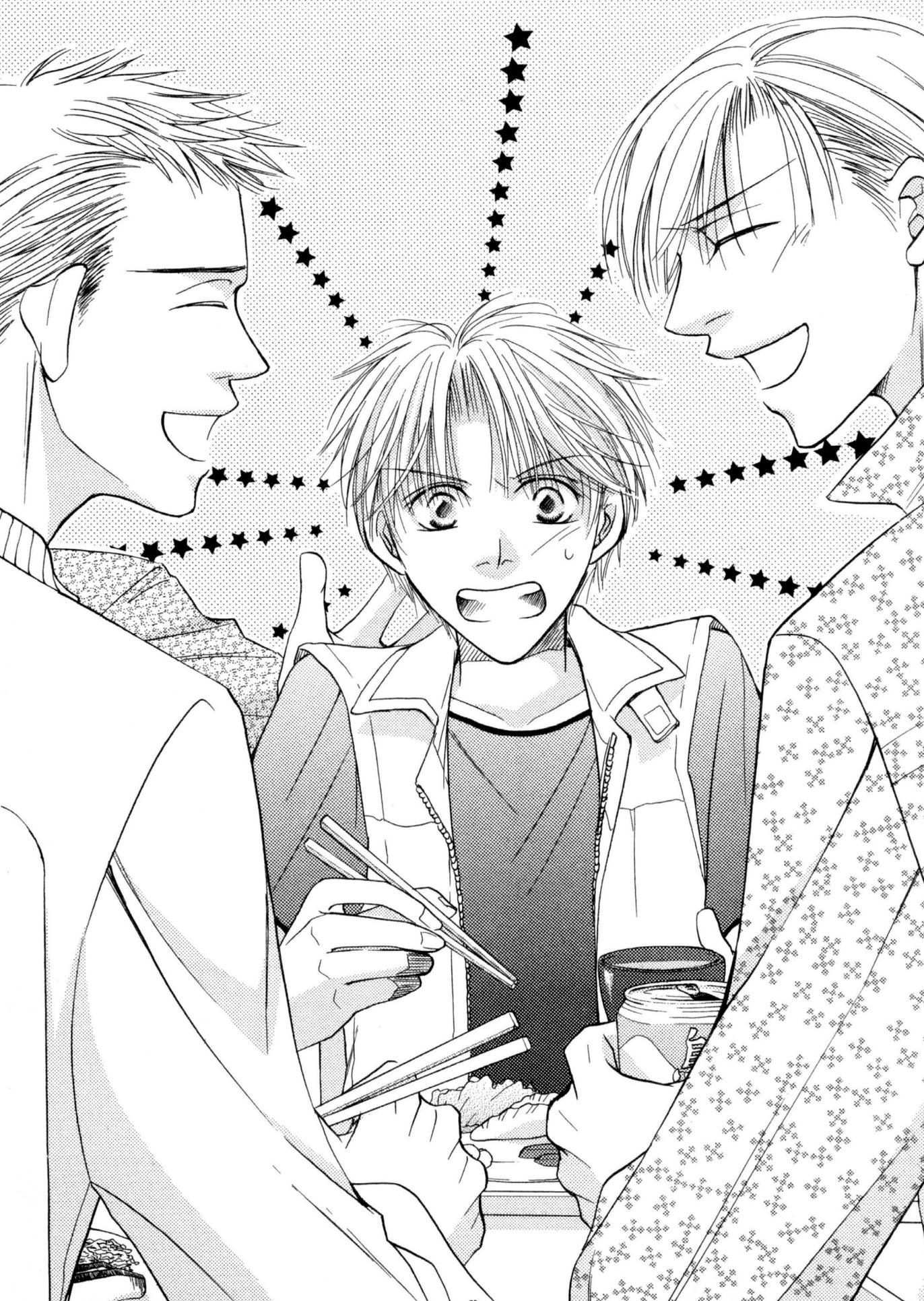
「やっぱ遊衣だよなあ」

「何だよ、失礼な！俺だけじゃないでしょ？ほかにまだしてない人、いっぱいいるよね？」

「いねえだろ。それは断言できるな。だいたい、今年から、二年生でもガイダンス出てよくなったんだぜ？二年の秋から就職活動してても不思議じゃないのに、三年の、それもそろそろ夏休みになろうというこの時期に、名のあるところやつらならともかく、俺らクラスの大学じゃ、やってないやつなんていねーっての。みんな春から動いてんだよ」

うんうん、と同意のうなずき。遊衣の食欲が突然なくなってきた。

「…ホントに？」



「ホント。うそついてどうするよ」

「からかってるんじゃないか？」

「からかってんじゃないわねえ。むしろ、心配してんだ」

「俺…俺、就職課行ってくる！」

食べ始めたばかりの学食のランチのトレイを手に、遊衣は立ち上がった。友人連中はいつせいにうなずく。

「そうしな。それがいい」

異口同音にそう言われて、遊衣はランチをほとんど手つかずのまま片づけると、ダッシュした。その背中に、友達の一人が声をかける。

「まあ、遊衣の場合、だめなら家業継ぎやいいじゃん」

そのセリフにどつと笑いが起こって。遊衣は振り返るとあかんべーをした。

「絶対就職するもんね！」

まず必要なものは、情報とリクルートスーツ。どうりで、最近、よくスーツを着た人を見かけると思っていたら。あれは、就職活動中だったのか。

就職なんて、四年になってから考えればいいと思っていた自分は、つくづく甘かったらしい。だって、年の離れた兄はそう言ってたし…。

そのころとは、就職状況が違うことなどまったく分かっていない遊衣は、それでも焦りながら就職課へ向かう。

「就職！ 絶対に就職！」

ぶつぶつとつぶやきながら、事務関係がすべて集まっている建物のドアを開けた。入ってすぐのところが学生課。奥に就職課、庶務課などがある。さっさと就職課へ向かおうとしたら、学生課の人が声をかけてきた。

「あれ？ 確か山本遊衣くんよね？」

「…はい、そうですけど？」

どうして、名前を知っているのだろう。げんなり顔で彼女を見ると、彼女は肩をすくめた。

「こんな小さな大学だもの。名前ぐらい知ってて当然よ、っていうのは冗談で、呼び出しをかけてもかけてもつかまらないから、いまみんなで写真見てたところなの。見かけたら、声かけましょう、ってね。

あなた、掲示板見てる？」

「すみません、見てません」

休講などの情報は友達から回ってくるから、掲示板なんて、ほとんど見たことがない。

「やっぱりね。はい」

彼女は小さなメモ用紙を遊衣に渡した。遊衣はそれを受け取る。

『平野教授。国語科。五階の四号室』

メモにはそれだけが書かれている。遊衣はますますげんなりな顔になった。

「これ、何ですか？」

「平野教授から呼び出しよ。至急、行ってきて」

「え…でも、俺、これから…」

「その呼び出しを受けたのは、もう一週間も前なの。逃がさないわよ。行かないって言うのなら、首ねっこつかんででも、連れて行くからね」

本気でそうしそうな彼女に恐れをなして。遊衣は、こくこく、とうなずいた。

「分かりました。いまずぐ行きます」

就職課は、別にそのあとでもいい。どうせ、何分かの違いだ。

「お手数おかけしました」

ぺこり、と頭を下げると、彼女はにっこりと笑った。

「いいのよ。でも、たまには掲示板もチェックしてね。だいたい、三年生でいまどき毎日掲示板見ない子の方が珍しいんだから」

彼女の言葉に首をかしげると。

「就職情報、いろいろ書いてあるでしょ？」

ああ、そうか、と遊衣は納得した。今度から、掲示板をちゃんと見よう。そうしたら、こんなに就職活動が遅れなかったかもしれない。

「そうします」

もう一度頭を下げると、遊衣は学生課を出た。

そのときは、これから何が起こるのか、知るよしもなかった。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

教授のお気に召すまま

《立読み版》

発行日 2012年5月11日

著者名 森本 あき

イラスト 水貴 はすの

発行所 【MILK-CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Aki Morimoto 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。